某侯爵の一人息子（三十代独身）をやってます。

高任斎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世日本人の記憶を取り戻した主人公は、銀英伝っぽい世界で、有名だけど名も無きモブに生まれ変わったことを知る。

モブの絶望を知り、モブの悲しみを知った主人公は、復讐の牙を研ぐ。

その牙が、目標をとらえることがあるかどうか……歴史が変わるかも知れない。

【注意】かなり陰鬱なお話です。ほのぼの成分などは皆無です。主人公は狂気入ってます。

目次

復讐に至る道。
1：私はモブだ、名前すらない。 1
2：クロプシュトックの絶望。 12
3：復讐へと至る道。 29
4：フェザーンの日々。 43
5：運命。 57
6：父に残すもの。 77
7：血塗られた道。 92

復讐に至る道。

1：私はモブだ、名前すらない。

前世の記憶を持って転生する物語の場合、大きく2種類に分かれると思う。

1つは、その世界に生まれた瞬間、もしくは幼少期から前世の記憶及び人格を保持して、赤ん坊や幼児時代から容赦なくブイブイ言わせていくパターン。

そしてもう1つは、何らかのアクシデントなりイベントによる物理的、もしくは精神的衝撃によって記憶を取り戻すパターンだ。

前者は、『子供がそんな無茶できるか！』という、読み手のツッコミ力を貯めることができる。

つまり、物語に登場するキャラクターの『こんな子供が!?』の部分に対し、読み手のツッコミ力が否応なしに共振してしまうわけだ。

そういう形で、読み手を物語の世界へと引き込もうとする……つまり、主人公が無茶をすればするほど、読み手のツッコミ力が上がっていくわけだから、無双系の物語に適していると言えるだろう。

そして後者はというと。

これは、どのタイミングで主人公に記憶を取り戻させるかを選択できる利点がある。

状況を作って、そこに主人公をポイっと放り込む……つまり、『いきなり絶望』とか、『死亡フラグが多すぎぃぃ！』の状況から物語が始められる。

穏やかな世界観の説明もなく、主人公の『え、これってどういう状況なの？』という戸惑いがそのまま読者に共感してもらえるし、主人公自身の理解や、ほかのキャラの説明がそのまま読者への世界観理解へとつながる。

巻き込まれ型のお約束というか、スピード感あふれる物語の展開を目指すのに適したスタイルと言えるだろう。

あと、放り込まれる主人公の状況が『悲惨であれば悲惨であるほど』読み手はワクワクする。

もちろん、その状況を納得できる形で切り抜けないと……読み手がそっと離れていくけどね。

まあ、ざっくりした分類だけど、前者が能動的な主人公を描きやすいのに対し、後者は巻き込まれ型の主人公というか、受動的な主人公を描きやすいかな。

あくまでも、傾向程度のものだけどね。

そういえば、現実は非情なんだよとばかりにそのまま主人公をバッドエンドに直行させる物語もあるらしいね。

夢も希望もないよ、ホント。
さて、ここまで話せばもう察しはつくと思う。
私は前世日本人の記憶持ちの、いわゆる転生者だ。
残念なことにというか、前者のパターンではなく、私が記憶を取り戻したのは、『母親に殺されそうになった』時だったりする。
そしてこの世界は、銀河英雄伝説の世界、もしくはそれに近似した世界だと思う。
原作のファンなら、かなり有名なキャラを連想したかもしれない。
期待に添えず申し訳ないというか、ファンの方はホッと安心するかもしれないが、私が母親に殺されそうになったのは6歳の時のことだから、某キャラに転生とか憑依したわけじゃない。
というか、あんな強キャラに私みたいな一般人が転生したら、色々と台無しになるだけだろう。
私だって、原作キャラのファンの夢を壊したくはない。
長々と勿体つけて申し訳なかった。
私は、原作において、いわゆるモブキャラで、名前すらない。（笑）
それにも関わらず、知名度は高いはずだ。
名前もないのに知名度ってなんだよと思うかもしれない。

じゃあ、私の父の名前を聞いてもらおうか。
私の父は、ウィルヘルム・フォン・クロプシュトック。
そう、原作本編のちょうど1年ぐらい前に起こる、帝国皇帝フリードリヒ４世暗殺未遂事件の犯人が、私の父親ということになる。
原作外伝において書かれた、ミッターマイヤーとロイエンタールがラインハルトの旗下に加わるというビッグイベントにつながる事件だから、クロプシュトック侯という名に聞き覚えのある人も多いんじゃないかな。
まあ正直なところ、私がこの世界で前世の記憶を取り戻し、最初に『クロプシュトック』と聞いたとき、ドイツの詩人を連想したんだけどね。
でもそれって、父親が有名ってだけのことじゃないのって？
いやいや、『クロプシュトック侯』の名前を知ってる人なら、私の父が何故そんな事件を起こしたか……３０年以上昔の因縁はともかく、直接のきっかけぐらいは覚えているんじゃないかな？
そう。
皇帝の後継者争いのレースに破れて、帝国中枢から追放されること３０年。
そもそも現皇帝のフリードリヒ４世を侮蔑しきっていた父は、その弟を担いで皇帝後継者レースに参加していたわけだからね。

中央には復帰できないというより、『あんな愚か者に頭など下げられるか』ってのが本音だろうね。
それでも、帝国建国時から続いてる名門貴族だからね……無茶はできない。
おとなしく領地経営に精を出していたわけだ。
そこで、後継者の一人息子が戦死。
一人息子は独身で、子供もいない。
帝国中枢からは追放されてるから、養子の手続きとかも無理……かな。
あ、クロプシュトック家、オワタ。
もう何も怖くない。
よーし、パッパ頑張って、積年の恨みを晴らすために皇帝暗殺しちゃうぞ。
息子よ、ヴァルハラで会おう。
ややフランクに説明したけど、原作からうかがえる背景はこんな感じかな。
そして、後継者の一人息子……これはつまり私のことだね。
どうかな。
名前すらないモブだけど、存在感とか知名度はなかなかのもんじゃないかな？
だって、前世日本人の私だって、『私』のことは覚えていたからね、ハハハ。
私の原作知識なんて、小説オンリーだよ。

アニメは見てないし、ゲームもやってないしね。
とてもじゃないけど、ディープなファンとは言えないだろう。
しかし、外伝を読んでいて良かったよ。
本編が始まる前に死んじゃった人間というか、死んでしまう『私』としてはね、何らかの手がかりがあるというのは、暗闇の中に光を見つけた気分だった。
私が死んでから、父が下げたくもない頭を下げ、賄賂を贈りまくって、ブラウンシュバイク公爵の邸宅で行われるパーティで皇帝の命を狙う流れだから……。
皇帝暗殺未遂から、メンツを潰されたブラウンシュバイク公が復讐のためにクロプシュトック領に攻撃。
ここで、ミッターマイヤーが軍規を乱す貴族を射殺した……からの、ロイエンタールとラインハルトの出会いと救出だ。
この直後に、ベーネミュンデ夫人による暗殺未遂……ミッターマイヤーとロイエンタールが早速活躍する流れで阻止したわけだけど、これが確か5月。
軍規がむちゃくちゃで、クロプシュトック侯爵の討伐に1ヶ月近くかかったはずだから……つまり、暗殺未遂事件は3月ぐらいに起こったと推測できる。
だったら、私はそれ以前の戦いで死んだはずだ。
『戦死』、だからね。

まあ、とりあえず素直に解釈したい。
ラインハルトがミッターマイヤーを救ったとき、確か地位は大将だった。
ミッターマイヤーとロイエンタールは少将。
原作本編は、ラインハルトとヤンが、初めてぶつかり合う……アスターテ会戦だったよな？
あの時ラインハルトは上級大将で、３個艦隊に包囲されかけながら、２個艦隊を叩きのめしたことで元帥に昇格したはずだ。
とすると、『私』が死んだあとに、もう一つ戦いを挟んで大将から上級大将に昇進した、か。
だったら、ラインハルトが『中将』か『少将』だった時の戦いで、私が戦死した。
ここまではほぼ一直線に推測できたんだけど……ラインハルトが少将だった時の戦いに、なんか覚えがあった。
イゼルローン攻防戦で、相手がミサイル艦使って、要塞内への侵入を試みたとかそんな感じ。
２０００か３０００の分艦隊を率いるラインハルトが、それを見破ったとか……そんな戦いがあった気がする。
准将なら、精々２００～３００隻ってところだから、たぶん、少将の時に参加した戦

いだと思うんだけどね。
なんにせよ、私の原作知識なんてそんなもんで……中途半端な原作知識に頼りすぎても意味ないし、でもおろそかにするのも怖い。
そもそも、名前もないモブの、しかも原作本編で描かれる前の出来事だ。
何が正しくて何が間違っているかなんてはっきりわかるはずがない。
暗闇の中、必死に生きていく。
それって、当たり前のことだ。
前世でそれなりに、人生の酸いも甘いも噛み分けたつもりだ。
そう思って、精一杯生きてきたよ、これでも。

ところで。
これまでの説明で、みんなはおかしく思わなかったかい？
中央から追放されているとはいえ、名門貴族の後継者、しかも一人息子が、戦場に赴くってなんだろうとか。
もちろん、帝国貴族は戦場に赴くってお題目はあるけどね、それが守られているとは言い難いし、一人しかいない血筋に関しては当然お目こぼしなんかもあるよ。

まあ、『この高貴たる自分が反乱軍ごときに……』なんて自信満々の連中もいるけど、一応は少数派だ。
つーか、取り巻きが命懸けで救おうとするしね。
指揮官というか、旗艦がやられる戦いなんて、そうそうあるわけじゃない。
つまり、それなりの貴族は、死ぬ確率が低い場所で戦うために地位が上がっていく……はずだ。
なのに、『私』は戦死した。
中央から追放されて、それでも名門貴族の後継者で一人息子が戦死する戦い。
しかも、地位はともかく、ラインハルトが『少将か中将』で参加した戦い。
その戦いで、『私』はどこにいたんだろうねえ？
ははは、ごめんね。
名もないモブについて、そんなこと考えたりはしないよね、普通。
まあ、当事者としては、考えざるを得なかったんだ。
そして、この世界で、『クロプシュトック侯爵の息子として』生きていかなきゃいけなかったし、曲がりなりにも３０代まで生きてきたんだ。
色々と知らなかったことを知ったし、見えなかったものも見えるようになった。

なあ、『子供の頃、母親に殺されかかった』なんて、原作には当然描かれなかった内容だよな。

どうしてそんなことが起こったと思う？

主人公や脇役が、それぞれの人生を送ったように、名も無きモブも、モブなりの人生を送ってきたんだ。

取るに足らない人生だからなんて言わないでくれ。

そこそこドラマティックな人生を送っているつもりなんだ。

聞いてくれるかな？

いや、聞かせるよ、つーか、聞け。

名も無きモブの魂の叫びを聞け。

そして、クロプシュトック家の絶望を知ってくれ。

原作から３０年前の、皇帝の後継者争いで何が起こり、どういう処分がなされたのか？

名門貴族の一人息子なんて、いい身分じゃん……なんて思うなら大間違いだ。

私がなぜ、一人息子になってしまったと思う？

私がなぜ、独身のままだと思う？

本当にいい身分なら、そんなことにはならないさ。

ははは、今の私には『父が皇帝をぶち殺したくなる気持ち』がよくわかるよ。
３０年前の恨みじゃない。
３０年間に渡って積み重ねられた恨みだ。
……こんな事を言うなんて、この世界でずっと生きてきて少し疲れたのかもしれない。
少し長い話になるが、頼む、聞いてくれ。

2：クロプシュトックの絶望。

さて、どこから話そうか。
結局、３０年前の皇帝の後継者争いのことから話すしかないのか。
本編でも、外伝でも少し語られていたけど……まあ、我慢して聞いてくれ。

前皇帝はオトフリート５世、歴代で言うと第３５代になるのかな。
現皇帝のフリードリヒ４世は、この前皇帝の次男にあたる。
長男はリヒャルトで、当然皇太子だった。
そして３男が、クレメンツ。
この、長男のリヒャルト皇太子と、３男のクレメンツとの間に後継者争いがあったわけだが。
クレメンツ側の謀略で皇太子に弑逆未遂の罪を着せ、粛清させることに成功。（帝国歴４５２年）
しかし、この皇太子の大逆罪が冤罪だったことが判明、それを仕掛けたクレメンツが今度は処刑された。（帝国歴４５５年）

まあ正確には、処刑されたんじゃなくて同盟に亡命しようとしたところで、謎の死を遂げたらしいが。

そして、放蕩生活で借金つくりまくって、周囲から馬鹿にされまくってた次男のフリードリヒ４世が、棚ぼた勝利、ファイナルアンサーってやつだ。

しかも、オトフリート５世が死んでこのフリードリヒ４世が皇帝になったのって、帝国歴の４５６年なんだぜ。

タイミング悪すぎぃ！

発覚するのが後１年遅かったら、３男クレメンツが皇帝になってたってことだろ。

ちなみに、クロプシュトック侯が支援していたのが、３男のクレメンツ。

そりゃあ、本来の後継者である皇太子に冤罪着せて処刑させちゃったグループにいたわけだから、お仲間の主だったメンツは粛清の嵐よ。

一応、その冤罪事件には関わりがなかったということで、父は処刑はされなかった……けど、現皇帝サイドからすれば、そんな存在を近くに置いておくわけにもいかない。

『おう、お前中央からハブるから。二度とその顔見せんなよ』

で、明確な処罰はされなかったが、新年の挨拶もできない状態の、中央追放状態ってわけ。

もちろん、これは原作の登場人物の主観で語られた背景だ。
見る人間が違えば、主観は異なる。
私は子供だったから、当事者とは言い難いけどね。
でも全力全開で当事者だった父から恨みのこもった話も聞けたし、それを私なりにフィルターをかけて、クロプシュトック家から見た、歴史的な背景を語ってみようか。
もちろん、父も私も神様じゃないから事実とは言えないし、あくまでも別の視点から見た背景でしかない。
それでも、歴史ってやつはいろんな面から光をあてて語られるべきだと私は思う。
そもそも、なぜ後継者争いが起こったか？
ここから語らなきゃ、問題の根っこは見えてこない。
ちゃんと長男の皇太子がいるんだ。
父もそうだが、なぜ多くの貴族連中が『3男のクレメンツを次期皇帝へと担ぎ上げる工作をしなければいけなかった』？
そう言われて最初に考えるのは、『そもそも長男の皇太子が愚鈍』だったってケースかな。
その次に、単なる権力争いってとこか。
仮に、『単なる権力争いだった』としたら、『放蕩生活を送ってる次男』を担ぎ上げた

ほうが、色々と便利じゃないかとは思わないか？
酒と女をあてがって、その下で好き勝手できる方が……権力志向の人間にとっては、便利な存在だろう？
無論、父親からほぼ勘当されていたとは言っても……後継者争いなんて、表面化するまで何年もかけて行うもんさ。
つまり、その状態に至るということが、そもそもおかしい。
支援者が、そんなことはさせないよ。
本人に、最初から『その気がなかった』というのが一番正しいだろう。
最初から、支援者を拒否した……その見方が一番しっくりくる。
父は今の皇帝のことをボロカスに罵るけどね、私としては、有能とは言えなくても愚鈍ではないと思う。
好意的に解釈すれば、兄弟で争いたくない……優しい人間だ。
完全にやり方間違ってるけどな。
そういう意味では、3男のクレメンツ。
支援者が大勢ついて、しかも本人にも争うつもりがあった。
父には悪いが、あまり褒められた態度じゃない。
仮に長男が愚鈍で、帝国の未来を憂いてのこというなら、自ら臣下としてそれを支え

るという態度もありだろう。
どうあがいても、『皇帝になりたがっていた』ということだけは確かだ。
さて、長男が愚鈍だったかどうか。
もちろん私も、父に聞いてみた。
『まずまず、水準以上の能力をお持ちの方だったと思うし、周囲からもそう思われていた』
いや、それなら普通に皇太子を支持しろよ。
素で、ツッコミいれたわ。
まあ、当時子供の私には、そこが限界だったわけだ。
当然、その先の事情がある。
先帝オトフリート5世。
かの人が皇帝になったとき、帝国財政は借金まみれだったらしい。
それで、超緊縮財政をとって、宮廷費用なんかも削りに削りまくったそうな。
その政策の是非はともかくとして、今の皇帝、フリードリヒ4世の借金まみれの逸話ってのは、ここに理由がある。
皇帝の息子といえば、貴族との付き合いも普通にあるだろうに……お小遣いというか、交際費すらろくに与えなかったそうなんだ。

まあ、そうじゃなきゃ酒場のツケが払えないなんて状況が生まれるはずがないもんな。

ただ、この先帝様、帝国財政の赤字をどうにかしようと熱中してるうちに、手段が目的に変わっちまったようだ。

一言で言うと、ドケチになっちまったそうなんだ。

赤字は解消されつつあるのに、超緊縮財政そのまんま。

イゼルローン要塞建設も、軍事費削減のために建設させたとされている。

まあ、建設させたはいいが、費用がかかりすぎて責任者を自殺させてるけどな……無茶苦茶だとは思うが、予定金額を大幅に超過したってことは、『皇帝の機嫌を取るため』に甘い建設計画や、費用見積を立てた誰かに責任があるのは確かだろう。

それが、建設責任者と一致してるかどうか……は、今の俺にも知るすべがない。

これだけ説明したら、なんとなく見えてくるだろう？

長男の皇太子は、皇帝の機嫌を損ねるわけにはいかないから、それなりにいい子を演じるさ。

慎ましい生活を送って……まあ、自分が皇帝になったらどうするかまでは不明だが。

さて、そんな皇太子を見た他の貴族はどう思う？

このままの方針で、帝国は経営されていくのか？

私の父、クロプシュトック侯を含めた貴族たちが、3男のクレメンツを次期皇帝にするべく工作を始めたのは、権力を握るためというより、まずは『景気浮揚』を目指してのの……悪く言えば、このままじゃやっていけないとか、やってられるかって思ってた貴族が多かったと言える。

超緊縮財政によって帝国全体の金の動きが鈍化したんだろうってのは想像できるし、父が言うには、貴族への支援が激減というか消滅状態になっていたそうだ。

そりゃあ、ただでさえ領地開発において不利な辺境星系なんかは……不満がたまっただろうし、将来へのおそれがあったんじゃないかな。

つまり、そういう連中に担がれるクレメンツは、『父親のやり方に強い不満を持っていた』と同時に、『自分の生活も、帝国経営も派手にやらかす』つもりでいっぱいだったと推測できる。

ああうん、父のクレメンツに対する評価は話半分で聞いてる。

意気豪壮にして、英雄の……はいはい、となりの芝生は青いし、思い出は美しいよね。

これで大分わかりやすくなってきただろう。

皇太子と3男の後継者争いの根本は、次代の帝国経営の方針の違いによる争いだ。

私に言わせれば、『お前らちゃんと話し合え』ってとこだ。

水準以上の能力を持ってるなら、その皇太子だって、方針ぐらい転換するわ。

そういう意味では、やはり権力争いという面もあったんだろう。
そして、不利な連中が無理をするのは世の常。
皇太子を謀略で葬らんしちゃった。
そうしたら、それを暴かれて、反対に葬らんされちゃった。
ああ、謎の死じゃないよ。
こっちには、全力で当事者だった父がいるんだ。
その場にいなかったとしても、殺されたという情報ぐらいは手に入れてるさ。
まあ、その情報の正誤を否定されるとどうしようもないけどね。
さて、誰がやったのかな？
まあ、それを言い出しても意味がない。
でもちょっと待ってくれ。
クロプシュトック侯爵家は、建国時から続く名門貴族だ。
皇太子を葬らんしちゃう策謀と無関係なんてことがあると思うか？
クレメンツを皇帝にしようとするグループの中心人物の一人だぞ。
もちろん、皇太子を葬ったことで、今度は内部における権力闘争が始まったのは父も認めてた。
でも、それまでは……ほぼ一致団結していたと考えるべきだろう。

相手は正当な皇太子……こちらが不利だったんだからさ。
その上で改めて考えよう。
仮に無関係だとしても、それを名目に粛清というかなくしたほうが後腐れがないって思わないか？
原作には出てこなかったが、この後継者争いに加担した貴族……核となる家とその取り巻きという感じに、皇太子と3男にそれぞれ２００や３００の貴族が加担したんだ。
そして、多くの家が取り潰しになった。
最初は、皇太子による弑逆未遂の罪。（冤罪）
これに絡んで、皇太子側の貴族が処刑された。
そして、3年後にクレメンツ側の謀略が発覚して……クレメンツ側の貴族が処刑される運びになったわけだ。
額面通り受け取るなら、クレメンツ側に復讐したい皇太子側の貴族は、いなくなってるんだよ。
うん、原作知識で言うならあの老人の仕業か、もしくはフリードリヒ4世にも、見えない支援者がいた。
さらに、処刑された皇太子側の貴族に何らかの縁を持つ貴族が、ひっそりと牙をむいたのかもしれない。

なあ、なぜクロプシュトック家が取り潰されなかったか……不思議に思わないか？
貴族連中は、婚姻関係でつながりを持つことが多い。
そして、貴族としての格のつり合いを取る組み合わせで婚姻する。
私の母親の実家も、それに見合った格を持っていた。
もちろん、婚姻関係を結ぶぐらいだから、それ以前からも仲の良い関係だった。
だから、３男クレメンツを担ぎ上げるグループで、一緒にやっていた。
もちろん、母の実家は潰された。
もう一度言おう。
なぜ、クロプシュトック家は取り潰されなかったか？
なぜ、母が私を殺そうとしたのか？
後継者争いに絡んで、多くの貴族が争った。
しかも、皇帝になるのは『あの』フリードリヒ４世。
周囲から侮蔑されまくってた放蕩息子なんて、皇帝の威厳を伴うと思うかい。
先のことはともかく、不安定なスタートになるのは目に見えているさ。
皇帝というか、当時の帝国中枢にいた権力者が、後継者争いの余波を広げたくないと考えるのは当然だよね。
クレメンツ側の謀略が発覚したのは、帝国歴４５５年のことだ。

発覚から処分までは、いくらかのタイムラグが生じるし、死なばもろともで反乱を起こした貴族もいる。

そして、フリードリヒ４世が皇帝になったのは、帝国歴４５６年だ。

つまり、先帝のオトフリート５世は４５６年に亡くなってる。

この貴族の処分に関して、先帝の意思が大きく働いた……とは思えないんだよね、タイミング的に。

次代の、フリードリヒ４世の治世を支えるために急遽集められた連中と、当時国政に関わっていた連中の合作案かなと思ってる。

貴族の家というのは、いろんな縁でつながっている。

後継者争いに参加した連中を全部ぶっ殺して、それでおしまい……と思ったら、思わぬ恨みを買ってました、なんてことが普通に起こりうる。

実際、皇太子についた貴族の関係者は、ほぼ処刑されている。

まあ、これは自分の身を守るために、クレメンツ側の貴族がそうさせた側面もあるけどね。

これは父も認めた。

しかし、やっぱりというか皇太子側の貴族と何らかのつながりを持っていた貴族が、色々と暗躍し始めたらしい。

誇り高い（笑）貴族だからね、復讐は正義なんだ、きっと。
それを踏まえたうえで、今度は、クレメンツ側の貴族を処分しなくちゃいけなくなった。
皇太子側の貴族と親しかった連中の恨みは、クレメンツ側の貴族へと向けられた。
だとすると、クレメンツ側の貴族に親しい連中の恨みは、皇帝に向かうだろう。
フリードリヒ4世の治世次第では、皇太子側の連中の恨みも皇帝に向かいかねない。
どうすればいい。
ああ、こうしよう。
貴族の恨みを、皇帝ではなく、別の何かに向けさせよう。
おそらく、クロプシュトック家は、生贄の1つに選ばれた。
父の意見に、私も同意する。
視点を変えてみようか。
私の母の視点だ。
同じように3男クレメンツ側についていたのに、自分の実家は潰された。
父が死んだ、母が死んだ、兄が死んだ、妹が死んだ、甥っ子が死んだ、姪っ子が死んだ、一門の家の人間が大勢死んだ。
ねえ、あなた。

裏切ったの？
私は最初から一人息子だったわけじゃないんだ。
弟がいた、妹がいた、姉がいた。
母に全員殺された。
みんな子供だったからね。
立ち上がることもできない妹を。
生まれたばかりの弟を。
使用人を殺し、寝ていた姉を。
まあ、このあたりは後で聞いた話だけどね。
使用人の立場からすれば、手を出しづらい相手ではあるよなあ……今更だけど同情する。
私は、物音と、血の匂いで目が覚めた。
刃物を構えた母の目を見て、前世の記憶が弾けた。
必死だったよ。
６歳だぜ。
体格差はいかんともしがたい。
それでも、前世の記憶による混乱がそうさせたのか、『母を他人と感じる気持ちが』私

の命を救った。
混乱していたし、恐怖もあった。
でも、実の母親に殺されそうになっているという動揺は感じずにいられたんだ。
もちろん、混乱が収まり……母との思い出が整理されるまでの間だったけどね。
そして最後は母が自殺。
貴族の自殺は、毒を煽って……という価値観の世界で、父と、そして私の目の前でヒステリックな笑い声を上げながら刃物で首を切った。
穢らわしい裏切り者って、父や私を罵ってね。
……ひどいもんだったよ。
屋敷の中に、血の香りが充満してるように思えてね。
別の場所に移動しても、鼻の奥でね、血の匂いがするんだ。
ああ、でも、どこか他人事に思えた私はまだ幸福だったかもしれない。
父にとっては、地獄だっただろうな。
あとは、わかるだろう？
母がそう思ったように、帝国の貴族は、処刑されなかった生贄を裏切り者と判断した。
直接グループに参加してなかったとしても、何らかの情報は伝わるものさ。
中央から追放？

甘いね。
事実上、貴族社会からの追放さ。
貴族は良くも悪くも誇り高い。
仲間を売って自分だけ助かる……そんな相手と交友関係を持ちたいと思うかい？
例の処刑で、親しかった仲間やグループを軒並み失ったクロプシュトック侯爵家には、交友関係を持つメリットがほぼなくなった。
ただでさえ、中央の権力者からは睨まれている存在だからね。
付き合いと言えるような関係を持てるのは、一門のみ。
それだって、機会を見つけて離れていく。
その度に、父の背中が小さくなっていくのがわかるんだ。
誇り高い父にとって、裏切り者だと、蔑みの視線を受けるのは耐え難い屈辱だったはずだ。
さすがにそれは聞けないよ、私は息子で、たった一人残された家族なんだ。
これでようやく、私も理解した。
原作の『私』になぜ子供がいなかったか。
ははは、結婚相手なんかいるわけないじゃん。
一門の誰か、もしくは平民ならどうかって？

前世日本人の感覚としてはそうなるんだろうけどね、それをやった瞬間、『クロプシュトック侯爵としての格がオシマイ』になる。
父に、そんな選択はできないし、原作の『私』だってそうだろう。
原作では領地経営に力を入れたとか言ってったっけ？
そりゃそうさ、ほかにやることないもん。
背中を丸めて、意識は内側へ内側へ……。
３０年前の恨みを良くも……と、気軽に言ってくれるなよ。
現在進行形なんだよ、父にとっては。
母が家族を殺しまくった屋敷。
父は、ずっとそこに住み続けているんだ。
もちろん、清掃はしたよ。
血の染みや、匂いなんてするはずがないんだ。
それでもね、私の目は、あの時の血だまりを映すことがあるよ。
私の鼻は、いまだに血の匂いを感じることがある。
そんな屋敷で、父はずっと住んでいる。
そういえば、原作の『私』が何を思って軍に属したんだろうか。
それは、私にはわからない。

ただ、私は迷うことなく軍人を目指したよ。
前世日本人？
前世一般人？
関係ないね。
だってほら。
復讐のためには、力が必要だろう？
レベルを上げて、物理で殴らなきゃ。

ああ、私はモブだ、名前すらない。
それでも私は、クロプシュトック侯爵家の人間だ。
父の恨みを、母の狂気を、姉の痛みを、弟や妹の悲しみを。
その資格はあるはずだ。
成功するとか失敗するとか、そういう問題じゃないんだよ。

３：復讐へと至る道。

さて、これである程度クロプシュトック家の状況は理解してもらえたかと思う。
ようやく、私がどのように生きてきたかについて話せるわけだ。
まあ、クロプシュトック領地内ならともかく、帝国で何かをやるために必要なコネがなくなってしまった状態だったからね。
地道にやるしかなかったよ。
もちろん、父を説得して貴族社会への復帰なんかも考えた。
ほら、曲がりなりにも父は皇帝暗殺未遂事件を起こせたわけだから。
同じように頭を下げまくって、賄賂を贈りまくったら復帰できるんじゃないか……なんて甘いことも考えたよ。
うん、残念。
世の中そんなに甘くないんだ。
おそらくあれは、３０年経ったからどうにかなったんだと思う。
人の足を踏みつけた方は５分で忘れるけど、足を踏み付けられた方はずっと覚えているって言うだろ。

私にも覚えがあることだけど、踏みつけられた当事者以外の人間にとっては、時間が記憶を風化させるんだろうね。

それ以外にも、３０年という時間の経過ってやつは、いろんな形で皇帝の後継者争いに関わった当事者を、権力世界から遠ざけてしまうんだろうね。

当時、私の父は３０代半ば……まあ、クレメンツ派の中心人物の一人ではあったけど、若い方に分類されたはずだよ。

基本的に、権力を握る人間は年寄りの方が多いからね……３０年も経てば、顔ぶれが変わるというか、代替わりもするよ。

それはそれで、復讐者の立場の私としては困ったんだけど。

まあ、代替りすれば、生々しい感情は伝聞へと変わり、自然に敵意も和らぐさ。

それに、想像してごらんよ。

後継者の一人息子をなくした父は６０代で……なんとか貴族社会に復帰して、養子をとってクロプシュトック家を受け継がせたいなどと賄賂とともに哀願すれば、相手の哀れみも誘えるだろうね。

名門貴族という肩書きが、より一層父の印象を哀れなものにしたと思うよ。

過去の記憶は風化して、もしくは伝聞の形でしか知らなくて……年老いた名門貴族の当主が哀れっぽく頭を下げて頼むんだ。

同情はもちろん、貴族としてのプライドをくすぐるんじゃないかな。
父がそこまで計算したかどうかはわからないけど、勝算はあると思うね。
あと、ほかの要素……おそらくだけど、フリードリヒ４世の治世になって３０年、色々と帝国の中のタガが緩んでたんだと思う。
皇帝が軽んじられ、門閥貴族の拡大に加えて、貴族が好き勝手やり始めた。
賄賂なんかが通用する、そういう社会になったってこともプラスに働いたと私は見ている。
そのあたりをひっくるめて考えると、結局、頭を下げて賄賂を贈って復帰へのとっかかりを得るまでには、３０年という月日が必要だったんだと思う。
原作において『３０年も昔の恨みを……』などと、気楽なことを言える人間が登場するのが証明してるんじゃないかな。
５年や１０年じゃダメなんだ。
うん、はっきり言うよ。
ダメだったんだ。
ははは、父は相手にもしてもらえなかったらしいよ。
そりゃあ、生贄だからね。
皇帝の後継者争いで生じた恨みを、集めてもらわなきゃいけないから……５年や１０

年で、人の気持ちが風化するなんて甘い見方はしないってことだろうね。
さすがだなと思うし、どこまで私は甘いんだとも思った。
そして、後悔したよ。
私のために頭を下げてくれた父に、さらなる屈辱を強いてしまったって。
結局、私はこれで腹を決めた。
父は、この世界で、たった一人残された私の家族だ。
死なせたくないと思った。
希望を与えたいと思った。
その気持ちは変わらないけど、中央に復帰してクロプシュトック家の復権なんて甘い考えは捨てざるを得なかった。
やるしかないだろう？
私は、クロプシュトック侯爵家の後継者だ。
当主である父の財産を受け継ぐ立場だ。
父の思いを、恨みを、復讐を、受け継ぐのは自然なことだろう？
いや、何もおかしくないだろう？
私だって、母、姉、弟、妹を奪われたんだ。
それだけじゃない、いろんなものを奪われた。

貴族でありながら、貴族としての生き方を奪われた。
誇りも、名誉も奪われた。
前世日本人だって、誇りはあるさ。
前世一般人だって、怒りはあるさ。
目の前で、母にあんな死に方をされたんだ……恨みを感じて当然だろう？

なんだか同じことばかり話している気がするな。
わかりにくくてすまない。
そう、レベルを上げて、物理で殴る、だ。
復讐のために力を手に入れる。
軍人を目指すことにしたって話だったね。
ははは、嫌になるぐらい現実を見せつけられてなお、私はまだ甘かったんだ。
軍人を目指す、と言うのは簡単さ。
でも、その時私はまだ、中央から追放および、事実上の貴族社会からの追放って意味をよくわかってなかったんだ。
私は、幼年学校の入学を拒否された。
我ながら笑えるよ。

母の死から、まだ４年しか経ってなかったんだよ。
復讐のために軍人を目指すなんて、『誰もが考えそうなこと』じゃないか。
警戒されて当然だよ。
『あなた』もそう思うだろう？
いや、単純に私が幼年学校に通うことで、貴族とのつながりを持つことを危惧したのかもしれないね。
今になって思うけど、仮に私が幼年学校に入学できていたら……ひどい目にあったかもしれないね。
クロプシュトック家の人間というだけで、周囲からどういう扱いを受けたか、想像するとちょっと怖いよ。
まあ、どうだっていい。
幼年学校に入学できなかった。
重要なのは、それだけだ。
もう想像はつくだろう？
士官学校も、試験を受けることすら拒否されたよ。
父が私のために頭を下げてくれたというのは、この件についてのことだ。
約１０年が過ぎたのに。

父は、相手にもされなかったんだ……。
原作の『私』は、一体どんな気持ちで軍人をやっていたんだろうね。
実際、幼年学校、士官学校と入学拒否されて、本気で尊敬したよ。
それはつまり、原作の『私』は、最高でも下士官、下手をすると1兵卒から軍人生活をスタートしたってことだからね。
名門貴族の後継者とはいえ、中央から追放されて、貴族社会からも無視されているような存在だ、おそらく戦場に出ることもなく軍人の階級を与えられて……なんて流れはなかったと思う。
侯爵家の後継者が、そこから……ああ、底とかぶちゃったね、意識したわけじゃなかったんだけど。
まあ、とにかく貴族の意識としては底辺からスタートするのは並大抵の決意ではなかったはずだ。
それに、原作の『私』は原作本編の1年前……帝国歴の486年ぐらいまで生き延びていたってことだからね、大したものさ。
そう思ったとき、少し震えたよ。
私は、『私』のように生きていけるのかと。
前世日本人の、前世一般人の私が、原作の『私』の決意を、生き様を、汚してしまう

んじゃないかって。
まあ、悪意的に見れば『やっべ、このままじゃ結婚もできねえ。ここは一つ軍で出世してワンチャン狙うべ』みたいな、かるーい動機だったかもしれないし、ほとぼりが冷めたところで軍に志願して、初陣で死んじゃったなんてギャグみたいな展開だったかもしれない。
うん、その可能性はある……否定はしない。
私は、そうじゃなかったとは思うけどね。
クロプシュトック家の絶望を味わいながら生きてきたら、そんなお気楽な性格にはならないと思うし。
ただ、少々原作の『私』を美化しすぎかも知れないとは思う。
でも、そのぐらいの夢を見ることぐらいは許して欲しい。
復讐って聞くと、どこかドラマティックで、鮮やかなシーンを連想するだろうけど……そこに至るまでは、もっと地道で、つらく苦しい道のりだよ。
復讐を成功させた人間。
復讐に失敗した人間。
もちろん、後者のほうが数は多いと思う。
でも、表に出てこない……復讐を諦めた人間は、もっと多いんじゃないかなって思う。

原作の『私』の存在を心の支えにしたいと考える私を、弱者と笑うかい？
うん、さっきも言ったけど、少し疲れているのかもしれない。
だから、こんなふうに私の復讐の根源を口にすることで、思いを新たにしようとしてるのかもしれないね。
すまない、また少し話がそれたね。
そう、最初に考えた、士官学校に入って、軍で出世して、レベルを上げて物理で殴る……というのが、難しくなったとこまでだ。
無理とは言わない。
３０年とは言わず、１５年ならどうだろう、２０年ならどうだろう。
また色々と根回しすれば、もしかすると、士官学校への入学が許されるかもしれないからね。
だって、少なくとも、原作の『私』は戦死できたんだ。
軍人になる道が閉ざされていたわけじゃないってことだろう。
前世日本人、前世一般人の私としての意見だけど、復讐で何が一番難しいって……『じっと待つこと』だと思う。
幼年学校への入学を拒否されたあと、私は父について領地経営を学びながら、領地の私設軍にも参加して軍人としての知識や鍛錬をして時を過ごした。

前世の記憶が知能におけるレベルキャップになってるんじゃないかって思うけど、身体能力に関しては前世のそれよりはるかに優れていた。
もちろん、貴族としての学習も……というか、実は一番これが苦手だった。
前世日本人の記憶の弊害かな、うん、そういうことにしとこう。
ああ、この頃はまだ私も、『復讐一色』ってわけじゃなかったなあ。
貴族社会の復帰、クロプシュトック家の復権に向けての長期計画とか、教育と鍛錬の合間に、夢見がちな坊やな日々を過ごしていた。
領地経営の合間にそんな計画を口にする私を……父がね、優しい目で見ていた。
たぶん、わかっていたんじゃないかな。
そして、言えなかったんじゃないかな。
私にとっては、いい父親なんだ。
逆恨みの挙句、皇帝暗殺に失敗したバカなんて言わせたくはない。
英雄に目を奪われることもあるだろう。
いぶし銀の活躍をする存在に胸を躍らせることもあるだろう。
でも、世界の大部分はモブで構成されている。
モブの悲しみを知ってくれ。
無意識にモブを踏みにじるのはやめてくれ。

いや、私にそんなこと言う資格はないか。
私は、復讐のために多くのモブを踏みにじってきたんだからね。
そしてこれからも踏みにじろうと思ってる。
それでも、モブの悲しみを、嘆きを、叫びを、忘れたつもりはない……というのはただの言い訳だ。
そして、士官学校にも入学できなかった後のことだ。
ようやく、私がクロプシュトック家の絶望を本当に理解し始めた時期だといえるね。
夢見がちな坊やではいられなくなった時期でもある。
もちろん、教育と鍛錬は続けた。
前世一般人だったけど、教育と鍛錬の日々にはそれなりに慣れているんだ。
苦手だったけど、貴族のマナーというか、貴族社会に出しても恥ずかしくない程度には貴族らしいことができるようにもなった。
まあ、必要にはならなかったけどね。
この頃だったかな、父に『顔つきというか、目つきが変わってきた』って言われたのは。
少し、父が悲しそうだったのが印象に残っている。
たぶん、私の中で『復讐』を『現実』として見始めた頃だろう。

私は鍛錬を続けながらも、復讐に至る別の道を模索し始めた。
頭を下げて、1兵卒からの軍人志望は、最後の……いや、最後からふたつ程手前の手段だ。
どうせやるなら、少しでも可能性が高い方法。
そして、できるならば父が笑って死んでいけるような手段……クロプシュトック家が復権を果たし、続いていく未来。
まだまだ私は、夢見がちな坊やだった……笑えるよ。
もしかすると私は、ものすごくポジティブな性格なのかもしれないね。
夢をあきらめない、希望を追い続ける。
前世日本人らしいだろ？

いろいろ考えた挙句、私は一度フェザーンに行くことにした。
帝国貴族でありながら、領地に引きこもって、しかもほかの貴族との付き合いもないとなると、帝国の動向にすら鈍くなる。
フェザーン商人との取引の際に伝わって来る情報だけではね、正誤の判断も取れやしない。
原作知識があるだけに、私はどうしてもフェザーン商人に関して色眼鏡で見てしまう

部分があってさ。
それはまずいとわかっていたんだけど、こんな状況のクロプシュトック家に地球教が手を伸ばすこともあるんじゃないかって考え出したら止まらなかったんだ。
そのためにも、一旦領地から離れて別の視点で世界を見たかった。
よく言えば、外に目を向けることができた。
悪く言えば、ただ待つことに耐えられなかった。
これが正しいかどうかなんてわからない。
私は、私なりに精一杯考えて、行動して、生きてきた。
もちろん、父とはいろいろ話し合ったよ。
フェザーンで何をするのか？
ただの観光に近い滞在なのか？
領地経営に絡めて、会社を作るのはどうか？
時期は、規模は……。
話すことはいくらでもあった。
その手段も含めてだ。
帝国貴族ってのは、不自由な生き物だ。
名目上は帝国領の自治区なのに、貴族がそこに行こうと思ったら、許可を取らなきゃ

いけないんだ。（笑）
まあ、どうしても宇宙船で移動しなきゃいけないからね。
誰が、どういう目的で、どの航路を……みたいなデータをもとに、星系巡視隊がパトロールしてるわけだから。
さて、幼年学校への入学を断られた私だ。
許可が下りるかどうか疑問に思うのは当然だろう？
一応、フェザーン商人とのやり取りなんかは普通に許されたんだけどね。
色々と話し合ったよ、色々とね。

拝金主義と蔑まれる、フェザーン。
生まれて初めて自分の目でそれを見たとき、私は１８歳だった。
おそらく、私は、原作の『私』とは違う道を歩み始めたんだと思う。
そのために私は……一旦クロプシュトックの名を捨てたんだ。

4：フェザーンの日々。

フェザーン。

うん、初めて見た時に、なんというか地球っぽいって思った。

いや、なんというか……他の貴族の領地を実際に目にしたことがなかったからわからないんだけど、少なくともクロプシュトック領というか星ってさ、すごく機能的な開発をしてるんだ。

資源の採掘に適した場所。

農業に適した場所。

工業地帯。

よく言えば、無駄なことはしないって感じ。

悪く言えば、領地の星そのものが、工業製品みたいな印象を与えてくる。

もちろん、そんな単純な話じゃないし、都市計画みたいなものとも少し違うんだけどね。

前世の記憶がある私としては、クロプシュトック領の星は、美味しいところだけを選んで食べているって感じを受ける。

父に言わせると、ほかの貴族の領地に比べたらかなり発展してるらしいけどね。
ああ、そうそう。
クロプシュトック家においては貴族同士の付き合いがほぼ消滅したから、いわゆる『交際費』がほとんど必要なくなった。
貴族の『交際費』ってさ、すごいんだよ。
例えば、パーティ。
今はこんなだけど、名門貴族、クロプシュトック家のパーティとなると、どれだけの貴族を招待しなきゃいけないか想像つくかい？
しかも、自分の領地じゃなく、オーディンの邸宅で開催しなきゃいけないことも多い。
……そりゃあ、自分の領地でやってもいいけど。
仮に、小規模だけど貴族２００家を招待したとしようか。
その２００家が、それぞれ護衛付きの宇宙船でウチの星にやって来たらどうなると思う？
宇宙港の設備はもちろん、大気圏外で駐留させとくにも限度があるし、当然それを迎えるたびに警備も必要で……しかも、それだけの数の私設軍が動き、集結するのって物騒な話だよね。
まあ、面倒な上に費用がものすごくかかるとわかってくれたらいい。

みんなが集まりやすい、オーディンでやるのが一番だと思うだろ？
基本的に、首都ってのは国の中心に位置することが多いからね。
それでも、辺境の貴族には負担が大きすぎて……パーティを開催するどころか、参加できないこともあるそうだ。
つまり、パーティを開催するってのは、『ウチの家、こんなに力がありますよ』って宣伝みたいなもんさ。
あと、貴族に社交の場を与えるって役目もある。
自分でパーティを開けない、人脈もない貴族……自分の傘下というか、グループに属する連中のために、パーティを開いてそういう場を与えてやるんだ。
これは、自分を頼りにして集まってくれてる貴族たちに利益を与えることも意味する。
前世日本人的に言うと、金の切れ目は縁の切れ目さ。
パーティを開けないような貴族は、頼りにならないってね。
実際、豊かで力を持ってる貴族じゃないと、大勢の貴族を招待するパーティなんか開催しないし、できない。
ああ、もちろん小規模なものとか、ごく限られた親しい関係どうしの私的なパーティは別だよ。

あと、女性のドレスとかアクセサリーの費用が馬鹿にならない。
下手をしなくても、御婦人方は見栄のためにドレスをパーティごとに新調するらしいからね。
仲の悪いご婦人が、お互いに意地を張り合うと、旦那は地獄だってさ。
まあなんにせよ、クロプシュトック家はそれなりのパーティを開催する貴族の格と資金も持っていたからね、『交際費』も半端な額じゃなかったみたいだ。
その膨大な『交際費』を使って、領地経営というか、領地開発。
ブロック経済の、公共投資みたいなもんだね。
フェザーンや、オーディンで無駄金を使わなくなった分、否応なしに内需は拡大するよ。
結果、この１０年ほどでデータはもちろん、見た目としても領地は発展してる。
なんだろう……前世日本人として色々と考えさせられたよ。
友人の結婚式のダブルアタックとかさあ……前世日本のジューンブライドって、夏のボーナスをご祝儀にあてるって前提じゃねえのって。
うん、馬鹿なことを考えたと思うよ。
まあ、そんな事を考えるぐらい……フェザーンという星は、私の前世の記憶を刺激するぐらい全体的に開発されているように見えたんだ。

正確には、フェザーン星系の第2惑星らしいね。
そのあたりはどうでもいいことさ。
だって、私の原作知識はそんなことまで覚えちゃいない。
つまり、確かめようがないんだ。
こうなってますと説明されたり、資料を見たら、そういうものなのかと納得するしかない。
ただ、フェザーンという星全体の発展は……なんと言えばいいのかな、恵まれたというか、自然の豊かなところというか……たぶん、かつての地球の環境に似た星だからってのもあるだろう。
地球教が、この星に目をつけたのは……そういう部分もあるかも知れない。
居住可能な星にも、いろいろ幅があるからね。
そのまま居住可能な星もあれば、膨大な時間と資本をつかって、テラフォーミング（笑）しないと居住できない星もある。
まあ、そういう星は大抵資源を採掘するだけで終わるよ。
効率的じゃないからという理由で。
そして、利益が上げられないなら放棄というか放置される。
データ上は、『開発次第で居住可能』な星ってことになるけど。

うん、ざっと資料に目を通したけれど、やはりフェザーンは恵まれた星と表現するのが一番しっくりくる。

そんな恵まれた星、フェザーンに私が訪れたのは、帝国歴の４６８年の夏頃だ。

今思えば、この頃はもう銀英伝の英雄の一人であるラインハルトが、この銀河に生まれてたってことになるのかな。

確か、原作本編の帝国歴４８７年頃に２０歳ぐらいだったから、そういうことになるはずだよね。

当時は、そんな事を考えている余裕はなかったなあ。

その気になれば、ヤンの父親を探し当てることができたかもしれないね。

探し当ててどうすんだよって言われたらそれまでだけど。

正直、原作本編で語られない部分なんて、何がその通りで、何が違っているのかなんて全然わからないからね。

原作知識をおろそかにしようとは思わないけど、それを探しあてて何をするのかって話になるし。

当時はもちろんだけど、聞き覚えのある存在を耳にするようになった今でも思うよ。

この世界は、本当に私が知る銀英伝の世界なのかってね。

近似的な世界であることに関しては、もう疑ってはいないけど。

正直、だからどうしたって感じることのほうが多いんだよ。
例えば、原作の設定をそのまま信じるならば、フェザーンにはこの一つの星に２０億近い人口を抱えていたことになるよね。
まあ、当時は、原作開始の約２０年前だから、もう少し少なくなるのかな。
でも、そんなことを考えても仕方がないことだろう？
私にできるのは、まずは、資料なりデータを信じること。
その上で、資料やデータに矛盾がないか考えるぐらいのことだ。
私の目に見えるもの。
フェザーンはよく発展している。
私のいるフェザーンの都市には、活気が感じられる。
まずは、これだけわかれば十分さ。
すべてを知ることができれば便利かもしれないけど、すべてを知ることができない以上、自分の目的に沿った知識を手に入れていくべきだ。

さて、私がフェザーンにやってきた目的は、情報収集のため。
可能ならば、情報収集のネットワークを作るというか、その下準備。
と言っても、わりと出たとこ勝負のいい加減なもんだよ。

おおまかに言うと、クロプシュトック領から、１００人程フェザーンに連れてきた。
大学に進学させる者。
技術的な専門知識を手に入れさせる者。
役人になる勉強をさせる者。
商売を始めさせる者。
理想を言えば、フェザーンで商売を立ちあげる。
その商売の規模が大きくなれば、帝国の首都オーディンはもちろん、自由惑星同盟に支店というか、窓口を作っても不思議はない。
要するに、情報をやり取りできるネットワークが欲しかったんだ。
そもそも、オーディンで何が起こっているかもろくにわからない状態で、復讐もへったくれもないだろ？
メインの目的としてはこれ。
他のは、人材教育と言いつつ……うまくいけばいいなあ、ぐらいのもんだね。
父は今ひとつわかってないみたいだったけど、フェザーンで生活させていろいろ学んだ人間が全員、クロプシュトック家に忠誠を誓うと思うかい？
失望したくないからね、私はいいとこ１割だと思っている。
特に、商売目的で夫婦や家族で連れてきた人間はどうかな。

帝国内の、ほかの貴族領での待遇と比べるなら、それなりに自信はあるんだけど……初めて見たフェザーン、知識として入ってくる自由惑星同盟のあり方は、たぶん、彼らの目には眩しく映ると思うんだよ。

人間の評価ってのは、初めて触れた文化に対して、高評価～反発～統合という流れで評価を定めていくけど、刺激が強すぎた場合は振り切っちゃうことがあるからね。

まあ、それはそれで仕方ない。

１００人なんて人数を連れてきたのは、私の存在を隠すためでもあったんだから。

役人見習いに、軍人見習い、そして一発旗揚げを目指す商人志望……フェザーン研修という名の集団の中に、私は紛れ込んだわけだ。

前世日本人の感覚というか価値観が大いに役立ったと思いたいね。

貴族ロールと、平民ロール、呼吸をするように自然に演じることができた……これはある意味私に備わった特殊スキルと言えるのかもしれない。

復讐という目的を思えば、これは強みと言えるだろう。

我々は、付き合いの深かったフェザーン商人の助けを借りつつ、複数のグループに分かれて共同生活を始めた。

田舎から都会に出稼ぎにやってきた気分だったね。

フェザーンの拠点なんていい方は大げさだけど、家を手に入れたりもしたし、ああ、私

はアパートの一室に、3～4人で共同生活とかしてた。
なんというかね、面白かった。
ほんの少しだけ、復讐のことを忘れていられた気がする。
一応、私は故郷で仕事もなく家も継げない……そんな立場の仲間（護衛）と語らって、フェザーンで一発旗揚げを夢見るグループの一員（笑）って感じ。
もちろん、夢を支えにして、バイトで生活費を稼いだりしてたわけだ。
あはは、新しく商売を始めようとしてる人間なんて、人手が必要なのに決まってるだろ。
見事なマッチポンプだね。（笑）
ああ、バタバタした生活だったなあ。
あっという間に時間が過ぎていくんだ。
そうそう、自由惑星同盟にも足を運んだんだ。
戦争は数だよ、じゃないけど、商売は資本だよってのは、ある意味間違ってないね。
まあ、あまり大きくすると今度は妨害とか入ってくるから、あくまでもそこそこを目指す、だけどね。
金が絡むと、人は魔物だからね……敵を作りすぎるのはよくない。
ただし、そこそこの商売を、複数だ。

情報の取捨って問題が出てくるけど、やはり情報源は複数確保するに越したことはない。

そう、ハイネセンを訪れた時は、ちょっと感慨深いものがあったね。

アーレ・ハイネセンの像も見てきたよ。

気分は観光客だったさ。

ただ、その際に訪れた、自由惑星同盟においていわゆる辺境と呼ばれる星系で見た光景には、あまり愉快じゃないものもあった。

まあ、同行してた仲間（護衛）の1人に『帝国も、同盟も、平民としてはあんまり変わらないんですね』なんて言われたときは、帝国の貴族の私としては、苦笑するしかなかったね。

同盟の民主主義については、役人の経験がある者は理解が早かったかな。

結局、集団の経営というか、人の支配形態だからかな。

もちろん、さっぱり理解できない者も多かったけど……理解できないというより、理解したくないって感じだったかも知れない。

ただ、そういう人間でも時折鋭い見方をするから、私もハッとさせられたことがある。

クロプシュトック領から連れてきた人間の反応は、一応は予想通りというか、最初はみんなフェザーンの文化に触れて興奮してたけどね、実際フェザーンで生活していくための勉強やら苦労を重ねるうちに反動が来た。

金を手にして姿を消した人間もいた。
でもまあ、これは想定内。
最初にその気があれば自由に生きて行けって言っておいたから別に、放っておいた。
何人かはすごすごと帰ってきたけど、特に罰することもしなかったよ。
金で感謝や忠誠心を買えるなら安いもんだ。
実際、この時に帰ってきた人間に、命を救われたこともあるんだ。
情けは人の為ならずって言葉を実感したよ。
そして、これが意外と多かったんだけど、クロプシュトックに帰らせた者も出た。
いろんな意味で適応できなかったのか、『帰りたい』って反応だね。
フェザーン商人との取引の際に、人をやり取りすることができるからね。
継続的に、十数人ぐらいの規模でこちらに新しく連れてきたりもしてたんだ。
フェザーンの空気を吸った人間がクロプシュトック領へと帰っていく。
それはごくわずかな交流に過ぎないけれど、原作にはない刺激と変化を生んだのかもしれない。
それを確かめる術（すべ）はないけれど。
フェザーンは、そして自由惑星もそうだけど、『実力と運次第でのし上がるチャンスがある』場所だ。

しかし考えて欲しい。
どちらかが欠ければ、惨めな思いを味わう可能性のある場所でもある。
前世日本人の記憶で、こんなネタを思い出したよ。
『学校の試験で何がわかるんだ』って意見に、『仮に、人間性まで含めた総合的な試験が行われたとして、それで落ちたら立ち直れるか？』って。
まあ、人間が生きていくには、言い訳が必要なんだって、ひどいオチさ。
変化と進歩が人間社会にとって必要なものなのはわかるけど、それは、戦争における『いかに効率よく味方を戦死させるか』って理屈と同じなのかもしれない。
私としては、どちらも理解はできるとしか言えないね。
そうそう、残るのはいいとこ1割なんて思ってたけど、人間ってのは思ったより保守的なんだなってことがわかった。
まあ、これは帝国の人間だからって部分もあるのかもしれなかったけど。
忠誠に関してはどうだろう？
『クロプシュトック領に生まれてよかったです』と言ってくれる人間は結構いたけど……まあ、父を認めてくれた気がして嬉しかったとだけ言っておく。
考えてみれば、フェザーンやクロプシュトック領、自由惑星同盟の間を行ったり来たり……移動距離に関してはなかなかの数年だったと思う。

なんとなく、地元と東京を往復し続ける前世日本の政治家を連想してしまったよ……三つ子の魂百までってのはこのことかな。

帝国の貴族が、領地経営に集中できないのは距離の壁もあるんだろうね。

場所によっては、オーディンとの往復で２ヶ月かかるんだ。

何かあるたびにそんなことを繰り返してたら、１年の大半は宇宙船の中ってことになる。

オーディンならオーディン、自領なら自領に腰を据えて……ってなるのは自然だと思うよ。

さて、そんな私のフェザーン暮らしにも転機が訪れた。

フェザーン１００周年にむけて……なんて話題がちらほら出始めた時期だったかな。

残念ながら、原作の細かい部分は記憶になかったから、そうなんだと思うしかなかったけど。

帝国歴で言うと、４７１年。

同盟へと亡命しようとしてた、帝国貴族との出会いだった。

５：運命。

さて、フェザーンの生活からいきなり亡命希望の貴族の話をされても困るか。
帝国歴４７１年頃ってのは、原作にはなんの描写もない時期じゃないかな？
だから、当時の帝国の状況を少し説明するよ。
フリードリヒ４世が即位して１５年、つまり、私の母が死んだあの日から、原作本編までのちょうど中間地点にあたるってことになるね。
エル・ファシルの奇跡も、まだ起こってない。
まだ、歴史は英雄たちの名を明らかにはしていない。
モブの私としては、名も無き英雄たちが歴史の中にうもれているだけと言いたいけれど、この時期の帝国と同盟との戦争は、お互いに決定力に欠けるって感じだね。
原作で英雄たちがやったような圧倒的勝利を繰り返したような存在はいないみたいだ。
というか、勝ったり負けたりの、『勝負』を繰り返してるってとこ。
ほどほどに殴り合って、お互いが退く……７対３で勝利、４対６で敗北、そんな具合かな。

ただそういう戦いって、大抵『お互いがお互いの勝利を主張する』ことが多いからなあ。

戦闘詳報なんかを手に入れない限り、私には詳しいことはわからなかったと言っておく。

それでも多少はわかることもあって、意外と言えば意外だったけど、戦闘の多くは、同盟の側が有利な形で終わることが多かったように思う。

考えてみれば、帝国が攻め込んで、同盟が防衛する立場だから、順当と言えなくもないか。

私の知る範囲の話だけど、同盟軍がイゼルローン回廊を通過して帝国領へと侵攻したのは、この時期まで一度もない。

つまり、同盟軍は攻め込んできた帝国軍を撃退するために存在した。

もちろん、1隻、2隻でこっそりと……ということがあったかどうかはわからない。

しかし、イゼルローン要塞が完成して、状況が変化する。

そう、大規模な前線基地が完成したおかげで、帝国軍の同盟領への侵攻回数が増えたんだ。

本来、同盟領への侵攻は、大規模遠征だったわけだからね。

イゼルローン回廊付近の辺境星系、ここで最終的な補給を終えて……いざゆかん、と

いう感じだったらしい。

軍事費削減を目指して要塞を作らせたという話が本当なら、先帝オトフリート5世にとっては皮肉な話だね。

そしてもう一つ皮肉な話だけど、イゼルローン要塞ができたせいで、回廊付近の辺境星系は、戦争景気というか、遠征景気からはじかれることになった。

辺境星系で物資が全て作られるわけじゃないけど、多くの軍艦、輸送艦が一時的とはいえ発着し、仮基地として物資が運び込まれてたわけだから、それなりの経済効果は見込めるはずだ。

まずは、それが消えた。

おそらく要塞建設時は物資の中継としてそれなりに賑わっただろうから、その反動は大きかったと思う。

もしかすると、このあたりの経済事情を見越して、皇帝の後継者レースに関わった貴族もいるんじゃないかと思う。

ついでに言うなら、同盟に対する警戒も、辺境星系付近から、要塞を中心としたモノに変化したわけだ。

回廊付近の星系を領地とする貴族には、踏んだり蹴ったりだっただろう。

同盟側から攻め込まれることがなかった以上、戦争は自分たちを潤す機会でもあった

はずだから。
……いや、兵士として住民が徴用される可能性もあるだろうから、良いことばかりとも言えないか。
その一方、帝国による侵攻の回数が増えたことで、同盟側も『こりゃおかしいぞ？』と思い始めたわけだ。
専守防衛の同盟にとって、そもそもイゼルローン回廊には必要以上に近づくこともなかったみたいだから、気付かなかったんだろう。
調査に乗り出して、初めてイゼルローン要塞の存在を知った……ようだね。
うん、おかしな話だと思うけど、推測というか、理由付けはできなくもない。
まず、戦闘において捕虜が存在するはずだ。
捕虜から、要塞についての情報は取れなかったのだろうか？
イゼルローン要塞の存在は、一応は機密事項だったんだろうけど。
同盟も、これまでのように回廊の外の星系で補給して、などと考えていたのかもしれない。
それが理由で、捕虜への尋問がおざなりになったのかもしれない。
もしかすると、捕虜から情報を得て……初めて回廊の調査に乗り出したのかもしれない。

かもしれない、ばっかりだ。
疑問はある、矛盾もある。
でも、ここでフェザーンの存在をとりあげたい。
イゼルローン要塞が完成したことで、『帝国と同盟との戦闘回数は急激に増えた』。
先帝のオトフリート５世がドケチだったってことは、その在位期間中、大規模な遠征なんかは平均より少なかったんじゃないかと思う。
オトフリート５世の皇帝在位期間は約１５年だから、帝国歴４４０～４５６年ぐらい、宇宙歴で言うと７５０～７６６年ぐらいの期間になる。
ちょうど、同盟のアッシュビー提督……７３０年マフィアだったっけ？
あの連中が大暴れしたせいで被害が格段に増えて、その費用が増大していたのは想像に難くないけど、アッシュビー提督が死んだ第二次ティアマト会戦が帝国歴４３６年の末。
この時に、いわゆる帝国にとって『涙すべき４０分』が生じた。
戦艦もそうだけど、多くの人材が失われて、再建のためには莫大な費用と時間がかかったわけだ。
そんなタイミングで皇帝になったオトフリート５世が、経費を削減しまくって、ひたすら尻拭いに努めてたと思うと、少し同情したくなる。

まあ、そのあたりはおいといて。
イゼルローン要塞が完成したことで、帝国と同盟との間の戦闘回数が増えた。
さらに、要塞の存在を知ってからは、積極的防衛のために、『同盟側が要塞に攻撃を仕掛け始める』ことになる。
どうもこの時期から、同盟の財政負担というか、軍事費が拡大してるっぽい。
これはあくまでも私の推測なんだけど、『フェザーンが言うところの、帝国と同盟の国力の調整が始まった時期』なんじゃないかと思う。
もちろん、原作においてこの種の発言をしたルビンスキーはまだまだその名を世に出していないけど。
そのバックを考えると、そうした誰かの意向があったというのは、それほどおかしくはないと思う。
戦闘回数が増える。
帝国と同盟、お互いの情報の必要性にかられる。
帝国と同盟が、フェザーンを通じて情報の収集を始める。
フェザーンの重要性、影響力が増す。
なあ、イゼルローン要塞建設を主導したのは、先帝オトフリート5世らしいけどさ。
先帝に、『イゼルローン要塞の建設を囁いた誰か』はいないのかな？

防衛や軍事費削減など、都合の良い理屈はいくらでも付けられるけど、それがもたらしたのは戦争の激化であり、泥沼化だ。

これを思いついたとき、少し怖くなった。

もちろん、納得できない部分はあるし、矛盾もある。

でも、大まかな流れとしては……私の推測というか、妄想には、それなりの説得力がある気がする。

『あなた』はどう思う？

はははは、まあこの頃の帝国と同盟との間の状況はそんな感じ。

両者の政治的交流は基本的に殴り合いだから、戦争オンリーの話をさせてもらった。

だから、次は帝国内部の話だ。

チョイ役のはずなのに印象深い存在。

私個人がそう思ってるってだけの話だけど、カストロプ公爵。

原作では、長期にわたって帝国の財務尚書の地位にあって、不正のオンパレードで金を貯めまくって、結局はそれを理由に滅ぼされた人。

なんというか、私の父と立ち位置が似てるかも知れない。

今思うと、原作のフレーゲル男爵なんかも不思議な存在だよね。

全１０巻の原作小説において、２巻ぐらいで部下に殺されて退場していったキャラ

だ。

２時間の映画で、３０分経たずに消えていったようなもんだよ。

なのに、原作を知ってる人はみんな彼のことを覚えているんじゃないかな？

傾向としては、バカ貴族の世界ランカーってとこだけど。

もしかすると、バカ貴族というより、敵役兼やられ役としてのアンチ英雄（ライン・ハルト）としての印象が強いのかもしれないけどね。

原作で描かれるそういう貴族たちの印象が強いせいで、帝国貴族に対して総バカ疑惑を持つかもしれないけど、ちょっと待って欲しい。

前世日本人の私だけど、帝国貴族の名誉を少しぐらいは守らせて欲しい。

帝国貴族４０００家。

人数で言うならもっと増えるだろうけど……人が大勢集まれば、一定のバカがいるのは当たり前じゃないか。

前世日本人の学校生活を考えればわかる。

４０人程度のクラスに、１～２人のバカがいたんじゃないかな？

そして、そのバカがやらかしたせいで、学校の生徒全体がバカ扱いされて、嫌な思いをした経験がある人間は多いと思う。

乱暴な話だけど、その割合を適用すると……帝国貴族４０００家で１００～２００家

のお馬鹿さんがいるってことになるよね。
いや、乱暴すぎる意見なのは私もわかってるんだ、でも、社会学においても、犯罪のない社会は異常だって言うじゃないか。
大学でも馬鹿がいたし、社会に出ても馬鹿はいた……率は変化するけど、どこにでもバカはいるんだよ。
そして、バカは目立つ。
そ、そういうことにしておいた方が、お互いの精神衛生上、良い……よね？
まあ、原作における帝国末期のあり方や、貴族の行動そのものについては何とも言えないけど……貴族に限らず、自由に生きることは難しいんじゃないかな。
誰にも事情があり、想いを抱えている。
クロプシュトック家を生け贄にしたやり方は……そうだね、帝国を主体に考えるなら、悪くない方法だと私も思う。
それを理解していながら、私は復讐を選んだ。
感情に振り回される愚かなモブ……それが私だと言われたら、否定はできない。
私には、原作のフレーゲル男爵はもちろん、帝国貴族たちを笑うことはできないよ。
その本質は、何も変わらないと思うから。

うん、また少し話がそれたね。
自分がこれまで歩んできた道を思い出しながら喋ってると、前世の記憶や当時のことを思い出して感情が高ぶったり、前後が曖昧になったりするんだ。
そこは許して欲しい。
えっと……ああ、カストロプ公爵だ。
この人も宮廷貴族として名門の一族なんだけどさ、原作初期……帝国歴４８７年に滅ぼされる。
このカストロプ公爵が、長期にわたって財務尚書の地位を利用して色々やらかした。
この長期ってのが、記憶間違いでなければ１５年だったと思う。
つまり、原作においてカストロプ公爵が財務尚書の地位についたのは、帝国歴４７１～４７２年頃、ちょうどこの時期だったってことになる。
ちなみにこの頃（帝国歴４７１年）は、リヒテンラーデ侯は内務尚書を務めていたかな。
その前は宮内尚書、そしてその前は財務尚書と、それぞれ数年の間その地位を務めて、将来のトップのために英才教育というか経験を積んでいる感じだったね。
ははは、まあ彼のことは後でゆっくり語らせてもらうよ……いや、敢えて語る必要もないかな。

さて、カストロプ公が、財務尚書の地位についた。
じゃあ、その前に財務尚書の地位にいた人はどうなったのかな？
普通に、引退？
あるいは、権力争いに負けた？
もう、察しがついたと思う。
カストロプ公が財務尚書になる前、財務尚書の地位にあった貴族。
原作ではそういう記述はなかったのだと思う。
でも、私は、この世界に生きていて、その情報を掴んだ。
ここは、リスクを背負うべきだと思ったね。
元、財務尚書で、帝国の権力者だ。
いや、同盟へと逃げ出そうとしている、元、権力者だ。
尚書といえば、その部門のトップの地位。
１５年前も、それなりのポジションにいたわけだ。
わかるだろう？
話が聞きたい。
できれば昔話を聞きたい。
こんなチャンス、そうそうあるもんじゃない。

復讐者にとって、時間の経過は味方でもあるけど、同時に敵というか障害でもあるんだ。
あれから、あの、母の最期を見た日から、もう15年も経ったんだ。
この15年で、一体私が何をした？
何を成し遂げた？
焦っている、もちろん焦っているとも。
そんな私の前に、美味しそうな餌がぶら下げられたんだ。
最低限の、そう、最低限の警戒心を残しつつも、飛びつかざるを得なかったよ。
こちらには貧弱とは言え、商売を通じた支援というか、同盟の拠点も用意できる。
もちろん、フェザーン商人としてだけど。
フェザーンにやってきたからには、同盟の弁務官あたりを通じて亡命の打診を行うつもりなんだろう。
権力を奪われ、叛徒と蔑んだ異国の地への亡命。
落ち目の人間の心は弱っている。
いくら虚勢をはろうとも、心にはいくつもひび割れができている。
その隙間に、そっと優しく忍び寄ってやろうじゃないか。
耳元で囁いてやろうじゃないか。

あなたの気持ちは、ようく、わかりますよ。
私も同じような立場で、ここにいます。
今のあなたのお気持ちは、よくわかるつもりです。
この時の私の行動が正しかったかどうか。
それは、私自身にもわからない。
もちろん、後世の歴史家が評価する以前に、目に止まることもないだろうと思う。
後世に名を残すつもりはない。
自分が何をやったか、覚書を残すつもりもない。
それでも、今なら言えるね。
もう少し、冷静にものを考えろって。
自己弁護になるけど、焦りもあったんだろうと思う。
気を抜けば死ぬ。
気を抜かなくても死ぬ。
そんな世界を生きていながら、フェザーンで過ごした期間が、私の中の何かを、鈍くさせていたのかもしれない。
私はモブだ。
ただし、原作におけるモブだ。

クロプシュトック侯爵は、原作でのチョイ役に過ぎない。
しかし、私の父は『帝国貴族社会において、チョイ役でもモブでもない』ってことを失念してた。
もちろん、『クロプシュトック』の名を出すことはしなかった。
それでも、一発で私の正体がバレた。
なぜだかわかるかい？
答えは、『顔』だ。
おそらくの話になっちゃうけど、私の顔を見て、父の『クロプシュトック侯爵』を思い浮かべたんだろうね。
ああ、人生には落とし穴が多すぎるよ、本当に。
原作知識があるがゆえに、私はずっと自分がモブだと思っていた。
でも、この世界の、貴族社会ではそうでもなかったようだ。
さて、ひと目で私の正体を見抜いた貴族は、ヒルトブルクハウゼン侯爵だ。
原作には登場しなかったと思うけど、この人も帝国においては宮廷貴族として有名な一族なんだ。
元財務尚書ってのは伊達じゃない。
うん、いろんな意味で伊達じゃなかったみたいだ。

単なる失脚じゃなくて、逃亡ってところが業が深いよね。
まあ、よりによって『カストロプ公爵に不正を糾弾されて』、処刑されそうになったから亡命を選んだって……こう、ツッコミ力の高まりを感じるよ。
お前(カストロプ)が言うなって。
うん？
この世界のカストロプ公も順調にやらかしているみたいだから、風評被害じゃないよ。
そうなると、ヒルトブルクハウゼン侯爵を糾弾した不正とやらも、怪しいもんだ。
まあ、このヒルトブルクハウゼン侯爵が、財産抱えてやってきた。
宇宙規模だからあれだけど、結局は夜逃げ（笑）とそう変わらない。
しかし、私の父程じゃないけど、このヒルトブルクハウゼン侯爵も、それなりの数の貴族に頼られてたはずなんだけど……寂しいものだね。
トップが逃げ出して、残された貴族たちは慌てて次に頼りにする誰かを探したんだろうけど。
亡命の手続きに関しては特に面白くはない。
フェザーンに上陸せずに、まずは自由惑星同盟の弁務官に人をやって、政治的（笑）亡命の意思を伝える。

そこからは、弁務官がハイネセンに連絡を入れたり、本人との通信面談で意思を確認したり……それなりに時間がかかる。
おそらくは、帝国もそれを察知してるんだろうけど、基本は静観することが多いみたいだ。
例の、クレメンツが亡命しようとした時とは違って、帝国にとってヒルトブルクハウゼン侯爵の亡命は、痛くも痒くもないと判断されたんだろう。
ただまあ、領地は……接収される。
その、接収するのが誰によるかで、色々と明暗は分かれるんだろうけどね。
なんにせよ、私が接触しようと思ったら侯爵がフェザーンへとやってこないとどうにもならない。
なので、ジリジリしながら待ったよ。
色々と伝手も金も使って会えたと思ったら、いきなり撃たれた。（笑）
前世記憶の異常なほど殺意の高いガンシューティングゲームを何故か思い出したよ。
……ああ、この左手の、手首から先は義手なんだ。
まあ、運が良かったと言えるだろうね。
そんな状況で死なずにすんだから。
そして運が悪かったね。

何も聞けないまま、ヒルトブルクハウゼン侯爵が死んじゃったから。
いやいや、心臓発作だよ、心臓発作。
ボク、何も悪い事してないよ。
むしろ、医者の手配とかしたのは私だったから。
場合によってはそのつもりはあったけど、会っていきなり『貴様、クロプシュトックの…』などと問答無用で撃たれた被害者だからね。
財務尚書の地位を追われて、同盟への亡命……心労が溜まってたんだろうね。
ああ、うん……倒れてから意識不明で、死ぬまでの間にタイムラグがあったのも、ちょっと不可解な死に方をしたのも認めるけどさ。
ちなみに、侯爵の奥方と娘とお孫さんは、同盟に亡命して密やかに暮らしてる。
侯爵が意識不明状態の時に色々と話をしてね、便宜も図った。
奥方の人柄に関しては一言で説明しづらいけど、なんというか……権力争いに負けた貴族の末路をよく理解してる人だった。
断片的な話になるけど、まず侯爵の息子夫婦が事故で死んだらしい。
この事故ってのがどうも怪しい。
調べてたら、今度はその弟が死んだ。
これで侯爵は、直系の後継者を失ったことになる。

すると、今度は侯爵自身の兄弟連中が蠢動を始めて……足の引っ張り合いを始めた。
そして殺された弟の残った家族が殺された。
泥沼だね。
そこをまとめて、カストロプ公爵が吹っ飛ばしたって感じかな。
つまり、不正（？）と身内のごたごたが続いたことによる、合わせ技一本ってとこか。
奥方から聞いた話と、耳に入ってきた情報をすりあわせて、足りない部分を推測で補った……まあ、信憑性はともかく、それほど真実から遠くはないと思う。
不思議なことに、侯爵の領地を接収したのは、カストロプ公爵らしい。
最初から飛ばしてるなあ。
原作ではなんで１５年も処罰されなかったんだろう？

そういえば、私には姉と、妹と弟がいた話はしたよね。
姉は私の３つ上で、妹と弟は母に殺されたとき、１歳と０歳だった。
今思うと、リヒャルト皇太子を葬らんして、父としては明るい未来を見てたんだろう。
皇太子がいなくなったのが帝国歴４５２年だからね。
クレメンツは次の皇帝となり、父は将来の重鎮としてやる気十分、気力十分だったんだろうね。

その直後に、妹が生まれて、弟が生まれたわけだから。
いきなりなんの話をしだしたって？
いや、この時期に、ヒルトブルクハウゼン侯爵は、随分酒量が増えたらしいんだ。
クレメンツが『謎の死』を遂げた頃。
そして、支援者の貴族の処刑をした頃。
深酔いして、ほぼ正体をなくしたような状態の侯爵から、奥方は『よくわからないこと』を耳にしたらしい。
うん、貴族女性らしい慎ましい物言いだ。
くわえて、いい性格をしてる。
私が、奥方に親切にする理由には十分だろう？
もちろん、騙されてる可能性はあるだろうけど。
いつの時代も、どの世界でも、女は怖い。
でもまあ、暗闇の中を手探りで進むよりかは、マシだったからね。

左手の治療というか、手に入れた情報やその他もろもろの事情の説明を含めて、私は一旦クロプシュトック領へと戻ることにした。
うん、戻ることにしたんだけど。

その際に、ひとりの女性が私についてきた。
メルケンドルフ伯爵の娘で、名を、マリアンネ・フォン・メルケンドルフという。
あれかなあ。
転生者らしく、あのセリフを言わなきゃいけないのかなあ。
どうしてこうなった。

6：父に残すもの。

マリアンネ・フォン・メルケンドルフ。
前世の記憶に引っ張られたのか、最初は『マリアンヌ』だと勘違いしてた。
うん、勘違いしてたんだ。
ろくな自己紹介もせず、『マリアンネです、マリーって呼んで』って言われたからね。
最初は彼女のことを、ヒルトブルクハウゼン侯爵の孫娘だと思ってたんだよ。
そりゃあ、世話もしたし、親切に声もかけたよ。
奥方との会話の流れで『クロプシュトック』の名前を出さないわけにはいかなかったのはわかるだろう？
言ってみれば、私という存在は、帝国貴族社会における鼻つまみ者だ。
同盟への亡命という事情でもない限り、普通に接してくれるなんて……それが表面上であろうとも、期待もしていなかった。
だからまあ、帝国でいろいろあって、しかも侯爵が倒れて意識不明だ。
女性の年齢に触れるのは厳禁だが、奥方はまあ、経験も含めた年の功なんだろうね。
帝国貴族社会のあり方を思えば、女性のそれも、なかなかに過酷な世界だろうと思う

し。

その一方で、孫娘たちはやはり心細そうにしててね。

声をかけても、返事をするのが精一杯で、『これから私たち、どうなるんでしょう?』などと、将来の不安を口にするぐらいだったな。

まあ、気晴らしのネタをいくつか提供する程度には親切で、紳士な対応をしたさ。

その中で『気丈にも』と思えたのが、マリアンネ嬢だった。

不安そうな姉妹……まあ、私がそう思い込んでいたわけだけど……を、励まし、時にはなだめ、私が提供した気晴らしのネタに彼女たちを連れ出す。

ああ、この3人の娘たちの中で『お姉ちゃん』なんだなと思ってた。

でも、あらためて話してみれば、彼女はメルケンドルフ伯爵の娘だという。

彼女いわく、『ヒルトブルクハウゼン侯爵様の孫娘とはお友達だから、フェザーンまで亡命のお見送りと、同盟に亡命しても連絡を取り合うことができるようにフェザーン観光を兼ねながら、コネ作りをしようと思った』そうだ。

正直、それを聞いてドン引きした。

あれだ。

前世日本人で言うところの、親の顔が見てみたいってやつだ。

ちなみに、メルケンドルフ伯爵も、たぶん原作には出てこなかった貴族だ。

ある意味、モブ未満の『その他の帝国貴族』ってことになるのか。
後で父から聞いた話が元になるけど、イメージとしては、原作のマリーンドルフ伯爵に似てるかな。
あまり争いを好まず、しかし一線を超えてきた敵には容赦しない。
権謀渦巻く帝国貴族社会だからね、優しいだけじゃいられないさ。
おそらく、マリーンドルフ伯爵も『帝国貴族としては』穏やかな人柄に過ぎないんだろう。
ああ、伯爵には内緒でやってきたと言うから、即座に連絡を入れさせた。
もちろん、ヒルトブルクハウゼン侯爵の奥方も立会の上での通信連絡だ。
放任主義なのか、それとも仕事が忙しいのか、連絡を入れるまでマリアンネ嬢の行動を認識していなかったのには、少々呆れたね。
２ヶ月以上家に帰っていないのに、何を……と思ったが、伯爵はオーディンにいて、マリアンネ嬢はメルケンドルフ領で生活してたそうだから、どちらかというと使用人の問題だったのかも。
しかしこの奥方も、強かというかいい性格をしてる。
伯爵に向かって、『男の世界には踏み込まないから、女の世界に踏み込むのも遠慮なさってくださいな』、ときたもんだ。

私の話だとピンと来ないかもしれないが、夫である侯爵が意識不明の状態、私がクロプシュトック家の者と知って『よくわからない話』をほのめかすんだぜ？

貴族社会ではよくある、言葉にしない契約ってやつだ。

財産はあっても、奪われたらおしまいだからな。

同盟に亡命してからの生活の保証と財産の管理の手助けというか、フェザーン商人や権利関係の力になれる人間の紹介。

それと引き換えに……さらりと、夫を私に売ったんだよ、この奥方。

医者から夫の病状を聞き、もう頼りにしても意味がないと判断したのかはわからないけどね。

男の嘘泣きはただの嘘だが、女の嘘泣きは本気の嘘泣きとはよく言ったもんだよ。

この奥方達が先に同盟に亡命し、落ち着いたところで、ヒルトブルクハウゼン侯爵は、延命に近い処置を打ち切られて、死んでいったというわけ。

まあ、元々医者からは回復の見込みはほぼないって話だったから……寿命だったんだな。

復讐という程のことじゃない。

と、ヒルトブルクハウゼン侯爵と奥方のことはまた後で。

マリアンネ嬢だ。

『せっかくだから、クロプシュトック領を見物させてくださいな？』

やや話が行ったり来たりしているが、これは侯爵の奥方と孫娘が亡命を認められて同盟へと旅立った後のことになる。

もちろん、侯爵はフェザーンの病院でまだ生きている。

この頃になると、最初のドン引きの感情は薄れて……やや警戒するような気持ちを抱くようになっていた。

リア充死すべしとか、そういう話じゃない。

これでも、前世では少年期からいくつかの恋愛を経て、結婚もし、孫も抱いた経験があるんだ。

女性が男性に向ける好意に関しては、鋭いとは言えなくとも、鈍くはないと思う。

彼女が私に向ける視線は、好意でも、興味でもなく、『観察』だったからね。

まあ、この時期、私は『復讐に関して』いくら探られても、何の問題もなかった。

実際にヤってないからね。

問い詰められたところで、『復讐の気持ちがないと言ったら嘘になる』と返せばいいだけの話。

復讐対象が『皇帝』となると、その発言だけでもやばいけど……父はともかく、私としては『生贄の件に関して皇帝は無関係』だと思っている。

まあ、復讐以外の話になると……まあ、ね。
復讐に関してはチェリーなボーイではあったが、人殺しという面では、何度か経験済み。
お金が絡むとね、どうしても色々とあるとだけ。
彼女に関しても後腐れのないように、こっそりと殺ってしまえばいいという気持ちがなかったわけではないけど……まあ、甘いんだろうね。
どうしても、女子供に手を出すのはためらいがあったんだ。
母や姉、妹に弟の事を考えると、余計にね。
許せないという気持ちが強ければ強いほど、そういう行為に忌避感を覚える。
ましてや、彼女は私に敵対しているわけではなかったから。
考えてみれば、クロプシュトック家に、一族とは無関係の帝国貴族のお客様を迎えるのは15年以上ぶりってことだったのか。
まあ、伯爵本人ではないにせよ、だ。
そして私は、父にヒルトブルクハウゼン侯爵の件を告げた。
奥方から聞いた話も添えて。
じっと話を聞いていた父が、私の左手を見たときの表情は……うん、父親の顔だったね。

原作の『私』が戦死したときは、どんな顔をしたのだろう。
この時の私の感情の動きというかうねりは、少し説明しにくいね。
血筋や貴族の格はどうでもいい、この父に『孫』を抱かせたい……ただ無性に、そう思ってしまったんだ。
復讐とは別の、父親に希望を、未来を与えたいという想い。
それが強くなったとでも言うのかな。
気が付くと、口に出してしまっていた。
血筋や、貴族の格はどうでもいいじゃないかと。
うん、それでも父は頑なだった。
久しぶりに殴られたなあ。
愚かと思うかもしれない。
それでも、これもまた貴族の誇りの一つの形だ。
私には、そのどちらもわかる。
折れることができない父と、それが理解できる私と。
そして、それ以上のことがわかる私。
原作の歴史には、帝国貴族の終焉が描かれているから。
原作のとおり、ラインハルトが台頭してきたら……クロプシュトック家が味方する？

おそらく意味がない。
クロプシュトック家もまた、門閥貴族であったから。
政治的に冷遇されていたから、状況を覆すためのパフォーマンスとしか思われないだろう。
何よりも、私の父がラインハルトの存在を良しとするとは思えない。
絶望というのと少し違う。
行き止まり。
どん詰まり。
気が付くと、私は泣いていた。
そんな私を見て、父も泣いた。
男が。
大人が。
あの日から15年あまり、クロプシュトック家の絶望は、何一つ変わっていなかった。
父が呟く。
この手に孫を抱けば、私は安心して復讐の道を選ぶのだろうと。
私の左手を見て、永遠に失われた左手を見て、胸が潰れそうになったと。
不確かな未来より、確かな『私』を守りたい。

それでいてなお、復讐の想いも捨てられずにいると。

気づくのが遅れた、いや気付かなかった。

そんな父と私を、マリアンネ嬢がじっと見つめていたことに。

『産んであげましょうか？』

彼女の言葉の意味、それを理解するのに少し時間がかかった。

しかし彼女は、その『間』を別の意味にとったのかもしれない。

『数代前には皇族も迎えた血筋……不足ですか？』

あぁ。

笑った。

父も笑った。

子供だ。

何も知らぬ、子供の意見。

メルケンドルフ伯爵が、それを認めるはずもない。

そもそも、貴族の家系図というか血筋に関してはきちんと帝国で記録される。
つまり、貴族同士の婚姻にはそれなりの手続きが必要で、許可が貰えないことはほとんどないとはいえ……クロプシュトック家の婚姻は、その少数の例となるだろう。
『私はただ、御子息の子を産んであげようかと申し上げました』
父は笑うのを止め、彼女に頭を下げた。
『お気遣いには感謝を。そして、我がクロプシュトック家の状況を簡単に説明しよう……その上で、同じ言葉を口にできますかな、フロイライン』
淡々と、父の説明は、ただ淡々としたものだった。
生贄に関しては、言わなかった。
ただ、周囲からは裏切り者として見られていること、そして帝国の貴族社会からはほぼ断絶された状態であることを、私の幼年学校の入学を断られた件を絡めて語っただけだ。
彼女が何を思ったのかわからない。
何を考えたのかもわからない。
彼女は、フェザーンでひっそりと私の子を産んだ。

父が、怖々と、赤ん坊を、孫を抱く。
涙を流しながら孫を抱く父を見て、私は……安心できた。
そんな私を、彼女はジッと見つめていた。
やがて父が、私に孫を……私と彼女の子を抱かせようとする。
それを彼女が押しとどめる。
なんとなく、彼女が言う言葉がわかるような気がした。
『復讐を願う手に、この子を抱かせたくないの』
ああ、そうだろう。
私も、そう思うよ。
父上に、そしてマリアンネに、感謝を。
優しい気持ちは、ここに全部おいていきます。
クロプシュトックの名も、置いていきます。
フェザーンのネットワークと、この、母の形見だけ頂いてまいります。

父が、どこか迷子のような表情で私を見ていた。
マリアンネの、冷めた瞳は相変わらず。
『フランツ』
一礼し、踵を返す。
『もういいんだ、フランツ。もう、いいじゃないか……この子を、孫の出生を、届け出よう。メルケンドルフ伯爵にもなんとか話を通す、だから、フランツ……』
足を止め、振り返る。
母の無念を、姉の苦しみを、妹の痛みを、弟の失われた未来を、そしてなによりも父上の悲しみを……名も無きひとりの男として叩きつけてきます。
フランツ・フォン・クロプシュトックは、死にました。
事故でも、病気でも、理由はなんでも。
一人息子が残した、一粒種。
合わせて、届出を。
ありがとう、マリアンネ。
父に未来を与えてくれて。
『……ずっといらない娘だったからね、必要とされたかったのよ。言ってみれば、親への復讐。私には止める権利なんかないわ』

彼女はちょっと笑って。
『ろくな両親じゃないわ、この子……ちゃんと見てあげてないと、まともには育たないわね』

私はモブである以前に、凡人だ。
何度も同じ失敗をする。
狂気に浸りきれない。
世界を閉ざす。
心を閉ざす。
狂気をまとう。
決意や覚悟では足りない。
氷だ。

熱はいらない。
溶けない氷。
母を思え、姉を思え、妹を思え、弟を思え。
自分にはもう、甘える相手はいない。
偽りの狂気を、自分のモノに。
狂え。
そうでなければ、復讐に耐えられない。

フェザーンの病院。
目を覚まさない、ヒルトブルクハウゼン侯爵。
復讐は権利じゃない、義務でもない、狂気だ。
さあ、後戻りのできない道を。

帝国歴、４７５年。
ヒルトブルクハウゼン侯爵が、フェザーンの病院で死んだ。

7：血塗られた道。

うん、まあこんなとこかな。
話しながらまとめるのって難しいね。
細かいことにこだわりすぎたり、時系列がバラバラだったり。
でもまあ、今までの話で、なんとなく事情は理解できただろ。
ああ、先に言っておくけど、大声を出しても意味はない。
じゃあ、外してあげるから少しおしゃべりしようか。

そして私は、彼から言葉を奪っていた轡を取り外した。
最初は戸惑い、その次に怯えや恐怖……私が長く喋っていたのもあるだろうけど、落ち着きを取り戻したようだ。
なによりも、私を睨みつける目に力が戻っている。
「狂人め……」
まあ、そうだろうね。
前世の記憶がどうとか、原作の歴史がどうとか……うん、狂ってるとしか思えないだ

ろうなあ。
でもまあ、そうとしか説明のしようがないんだ。
「クロプシュトック侯は、クレメンツ大公の企てに参加していたのだろう？ならば処刑が妥当なところ、命を助けてもらっておいて、復讐だなんだと申すか！」
ああ、うん。
その理屈は、ほかの人からも聞いた。
だから同じ答えを返す。
理屈じゃなくて感情の問題……狂気の沙汰だ。
話はする。
言い分も聞く。
でも聞くだけだ。
考慮しない。
考慮する意味がない。
私がクロプシュトックの名を出した以上、あなたは死ぬしかないし、私は殺すしかない。
あなたの父親は、能力のない人間を引き上げることはないようだし、それは身内も含めての話だろう。

３０代で省のトップ３の地位についている……あなたの優秀さは疑いようがない。
そんなあなたが、それに気づかないわけがない。
ちなみに、私がここまで時間をかけて喋ったのは、『あなた』に対して親近感を抱いているからだ。
「親近感……だと？」
そう、『あなた』も私と同じように、父親が有名だ。
もちろん、クロプシュトック侯爵とリヒテンラーデ侯爵とでは、随分と差があるとは思うけど。
父親が有名で、しかしその息子は『死んだことでしか語られない』ってところがね。
女子供以外は、リヒテンラーデ一族は皆殺しだもんなあ。
……ああ、そんな顔をしないでくれ。
狂人の頭の中の歴史のお話さ。
この世界の歴史が、そのとおりに動くかどうかはわからないけどね。
実は今、少し楽しみにしてることがあってね。
ああ、あなたを殺すことじゃない。
別に、復讐は……あなたにとっては逆恨みかもしれないけど、特に楽しいものでもないよ。

やるべきことをやっている。
仕事みたいなものさ。
私にとってはね。
狂人のやることだよ、それでいいじゃないか。
「……私を殺したところで、父はなんの痛痒も覚えぬよ。父にとって重要なのは、陛下であり、帝国そのものだ。息子である私はもちろん、姉や妹、甥や姪が死のうと、顔色一つ変えずに職務に励むだろうさ」
吐き捨てる……とはちょっと違う、どこか自嘲の響きがあった。
「さっき、カストロプ公の話が出たな」
え、ああ、そうだね。
「カストロプは、生贄だ……父は、この先帝国の統制が乱れていくと見ている。貴族の不満や恨みはどこへ向かうと思う？当然、陛下だ。だからこそ、父は生贄を求めた……おぞましい話だ」
ああ……なるほど。
じゃあ、やはりそうなのか。
状況証拠に過ぎないとは言え、クロプシュトックの生贄に関して、その中心にいたのは間違いなさそうだな。

まあ、新事実というより、前からわかってたことを、確認するぐらいの感覚だけど。

彼から情報を聞き出す手間が省けたと思おう。

「貴様の……クロプシュトックの話を聞いて、納得すると同時に笑いたくなった。あれほど優秀な父であっても、成功体験にとらわれるものらしいとな。生贄（カストロプ）が好き勝手やればやるほど、生贄（カストロプ）は孤立を深め、ますます貴族の不満が集中する……バカバカしい、その理屈はわかるが、ただの先送りに過ぎん」

彼の表情が歪む。

それがどこか、泣くのを我慢する子供のように見えた。

だから、ほんの少しだけ、止めてやるべきかと考えてしまった。

「陛下だ、父は陛下のことしか考えていない……最悪、陛下の御世さえ無事に終わればそれでいいと思ってるフシさえある……何の意味がある、それに一体何の意味がある……未来や、希望を切り捨てるだけではないか……」

その言葉に、冷たいものを感じた。

原作におけるフリードリヒ４世が言った言葉、『滅びるならせいぜい華麗に滅びるがよい……』だったか。

帝国の状態というか、行く末に関して……『リヒテンラーデ侯が気付かなかった』なんてことがあるのだろうか。

財務尚書、宮内尚書、内務尚書と歴任し、今は国務尚書。
国務尚書ってのは、言ってみれば帝国宰相代理みたいなものだ。
下からの報告が完全に正確に行われているかどうかについて疑問はあるけど、帝国の状態について最もよくわかっているのが、リヒテンラーデ侯と言っても過言じゃないだろう。
仮に、わかっていて何もしないというなら、２つの理由が考えられる。
１つは、何らかの理由で、解決策を実行できない。
これは、権力、予算など、いくらでも要素がある。
陛下の強権も……帝国全盛期のそれには程遠い。
というより、予算の制約は大きそうだ。
うん、ありえるといえばありえる。
そしてもう一つは、手遅れだから。
何をしても先送りでしかない。
ああ……そうか。
リヒテンラーデ侯には、言うことをきかせる武力がない。
ラインハルトとは違うんだ。
と、すると……原作でリヒテンラーデ侯爵がラインハルトと手を組んだのは、単純な

権力争いってだけじゃなく、邪魔な門閥貴族を一掃するという狙いもあったのかな。
帝国を経営するうえで、何が問題かというと……結局は貴族の存在にぶち当たる。
それぞれの経営手腕の問題じゃなく、帝国の領土のつながりが寸断されるという意味で。
良くも悪くも、社会は変わる……いや、状況は変化していく。
帝国の体力そのものが減衰していること、これが重要な変化だ。
商人の真似事をしていると、殊更にそのことがよくわかる。
商人には、貴族全体を動かせない。
既に皇帝もそれができなくなっている。
皇帝が命令すれば、みんなが言う事を聞くなんて単純な話じゃない。
だったら、そもそも後継者争いなんて起こらない。
みんながみんな、自分の都合で動く。
権力も、人も、そんな単純なものじゃない。
面従腹背、消極的不服従、そんなものは、どこにでも転がっている。
それが積み重なれば、何も動かなくなる。
言ってみれば、ラインハルトの存在は、劇薬だ。
上手く使おうと思ったか、それとも……。

気が付けば、考えに耽っていた私を彼が見つめていた。
「貴様はもともと処刑されるべき一族だった。その境遇に哀れみを感じないとまでは言わんが、私は貴様を不幸とは思わん。父親に愛されていたのだろう？そして自らそれを捨てた……馬鹿で、狂人だ」
ああ、罵声や呪いよりずっと効くね、その言葉は。
そっか、リヒテンラーデ侯は、家族にとってはいい父親ではなかったか……仕事人間と評するのは簡単だけど。
「……私のことはもういい。姉や妹、甥や姪には手を出すな、いや出さないでくれ、頼む……と、言うこともできなかったのだな、貴様は」
未来は誰にもわからない。
でも、その予定はないから、ひとまずは安心していいよ。
というか、あなたはなんで独身なの？
私より年上で、出世もしてるんだから……そのあたり、リヒテンラーデ侯爵は、しっかりしてそうなのに。
昔、婚約者が病気で死んじゃったのは調べたけど。
「……」

あ、いや。
話したくないなら別にいいや。
隠れて交際してる女性がいるとか、ひっそりと子供がいるとかなら伝言を届けてもいいぐらいに、親近感は持ってるんだよ、本当に。
「仕事が忙しくてそんな暇はない」
あ、はい。

こういう事を聞くと、世界が宇宙でのドンパチと陰謀だけで構成されてるわけじゃないって実感する。
リヒテンラーデ侯のスケジュールを調べたことがあるけど、もちろん断片的にしかわからなかったけど、６０過ぎの人間のスケジュールじゃないよ、本当に。

ふう。
じゃあ、殺ろうか。
私のつぶやきに、彼の瞳がかすかに揺れる。
まあ、そんなもんだろうと思う。
悲鳴を上げたり、泣き叫ばないだけ立派だとも思う。

泣こうが喚こうが、みっともないとは思わない。
誰だって、死ぬのは怖い……当然だろう。
その、家族の『死』を弄ばれた私が、誰かの『死』を弄ぶ。
まさしく、狂気の沙汰だ。

拘束されている彼の身体を持ち上げて、袋に入れる……二重に。
不安そうな彼に説明してあげた。
血の汚れはおとすのが大変だからね。
そう言うと、おそらく私の実家の惨劇を思い出したのだろう、彼は何も言わなかった。
まあ、それは間違いじゃない。
ただ、前世でも、飛び降りや飛び込み自殺があったけど、あれ、後始末をする人間がいるんだよ。
その人の話を聞いたことがある、それだけだ。
『飛び降りるなら、ゴミ袋を3重にして、その中に入ってから死んでくれ』
あの言葉は結構衝撃的だった。
「……次は、父を狙うのか？」
警護が厳重だから、そう簡単にはいかないかな。

あと何人か、確かめたい人もいるし。
グリンメルスハウゼン子爵あたりから、なんか面白い話でも聞けないと思ってるんだけど。
彼が怪訝そうな顔をする。
やはり、そういう認識か。
まあ、私も、彼が原作通りの人間じゃないと思っているし、原作での発言が全て正しいとも思っていない。
他人に知られてはいけない秘密を、かの老人の前で、ひとりやふたりならともかく、何人もが話すのは不自然だ。
どんなに侮っていても、陛下のそばに仕えていた人間の前で漏らしてしまうような秘密は秘密じゃないだろう。
普通に考えるなら、何らかの諜報組織があって……そのトップってことだろう。
ただ、それならそれで何らかの噂が出てもいいはずなんだけど……。
今まで殺した連中の反応も、みんな彼みたいな感じだしな。
正直、わからない。

母の形見を手に取る。

母が家族を、自分自身を殺した刃物。
そして、私を殺そうとした……大切な形見。
刃を見る。
手入れのおかげで、曇りはない。
刃に映る私を見ながら。
母を思う。
姉を思う。
妹を思う。
弟を思う。
これまでに殺したのはほぼ、老人、もしくは初老の人間だった。
彼は、無関係だ。
ただ、リヒテンラーデ侯の1人息子というだけで、殺す。

笑い声が出た。
前世の記憶だ。
ぴったりのシチュエーションじゃないか。
なのに、彼にはその言葉の本当の意味を理解することができないだろう。

『……君のお父上がいけないのだよ』
ああ、私の声じゃないみたいだ。
やはり、借り物の言葉には、力がない。
笑いが止まらない。
いいさ、笑いながらで。
笑いながら殺ろう。
楽しむことが大事だって、誰かも言ってたしな。
母の形見を手に握り、彼の左脇の下から刃先を刺した。
身動ぎをさせないように、左手で肩を押さえながら、右手を深く差し込んでいく。
鎖骨の隙間から心臓を狙うと、血が噴き上がって汚れる。
本当に、噴き上がる。
母の形見を抜く。
溢れる血が、袋に溜まっていく。
押さえつけている彼の身体から、目から、力が抜けていくのが分かる。
血をこぼさないように、彼の首の部分で袋を縛っていく。
1枚目。
2枚目。

いつしか、私の笑いは収まっていた。

そして、私は日常に戻る。
日常に潜む。
彼の死は、何らかの憶測を生むだろう。
私なんかより優秀な人間は、それこそ腐るほどいる。
おそらく、破滅の時は近い。
いや、最初から終わっているようなもんだ。
私は、どこまでいけるだろう。

ほどなくして。
私が楽しみにしていたこと。
狂人の、頭の中の歴史のできごと。

それが起こった。
エル・ファシルの奇跡。
帝国歴４７９年、この宇宙に、英雄が生まれた。
名前を確認するまでもないだろう。
英雄たちの物語が始まる。

その宇宙の片隅で、私は復讐者として地を這い、闇をゆく。
来年、帝国歴４８０年に、私は３０歳になる。
原作の『私』は、おそらく帝国歴４８５～６年あたりまで生きた。
私はどこまで行ける（ころせ）だろう。
私はどこまで生きるだろう。
ヴァルハラに興味はない。
既に、家族に別れは告げた。
地獄へと続く、血塗られた道を、私は歩いていく。